

アトピー性皮膚炎 小児(1)

プロアクティブ療法により寛解を維持したアトピー性皮膚炎の5歳男児

豊國賢治(国立成育医療研究センター総合アレルギー科)

監修

福家辰樹(国立成育医療研究センター総合アレルギー科医長)

成田雅美(東京都立小児総合医療センターアレルギー科医長)

1. 症例

○ 5歳男児 身長 105cm 体重 17kg

○ 主訴 皮疹、皮膚の掻痒

○ 現病歴

✓ 乳児期から湿疹があり、近医を受診。ステロイド外用薬が処方され塗布すると症状が改善していた。

✓ しかし、その後も湿疹の再燃を反復し、ステロイド軟膏を塗布すると改善するが、止めると悪化するということを繰り返したため、当院を受診。

1. 症例

- 5歳男児 身長 105cm 体重 17kg
- 主訴 皮疹、皮膚の掻痒

- 既往歴
食物アレルギー(鶏卵)

- 家族歴
父:気管支喘息、アトピー性皮膚炎
母:アレルギー性鼻炎

- 皮膚所見
頸部、肘窩、膝窩などに掻爬痕を伴う
左右対称性の湿疹あり

2. Question

○ 鑑別診断は以下のどれ？

A: アトピー性皮膚炎

B: 接触皮膚炎

C: 脂漏性皮膚炎

D: 疥癬

E: 乾癬

3. 検査

○必要な検査

- 血液検査

3. 検査

○結果

総IgE 1800 U/mL

特異的IgE

ヤケヒョウヒダニ 78.5 UA/mL (5)

イヌ 12.5 UA/mL (3)

ネコ 18.5 UA/mL (4)

スキニ 35.5 UA/mL (4)

マラセチア 2.85 UA/mL (2)

卵白 2.15 UA/mL (2)

オホムコイト 0.40 UA/mL(1)

TARC 2112 pg/mL

4. 鑑別診断と解説

○ アトピー性皮膚炎

- ・ 掻痒を伴う湿疹を繰り返す
- ・ 頸部・肘窩・膝窩などの好発部位に左右対称性にみられる
- ・ 以下のアトピー素因をもつ
 - ・ 食物アレルギーの既往
 - ・ アレルギー疾患の家族歴
 - ・ IgE高値、吸入抗原に対する特異的IgE高値

→アトピー性皮膚炎として矛盾しない

5. 診断

○ 最終診断

アトピー性皮膚炎

(中等症;強い炎症を伴う皮疹が局所的にあり)

○ アトピー性皮膚炎ガイドラインなどから

乳児期あるいは幼児期から発症し小児期に寛解するか、あるいは寛解することなく再発を繰り返し、症状が成人まで持続する特徴的な湿疹病変が慢性的にみられる。

年齢により好発部位が異なる。

6. 疾患についての解説

○ アトピー性皮膚炎の治療

アトピー性皮膚炎の治療方法は、その病態に基づいて、

①薬物療法

②皮膚の生理学的異常に対する外用療法・スキンケア

③悪化因子の検索と対策

の3点が基本になる。

これらはいずれも重要であり、個々の患者ごとに症状の程度や背景などを勘案して適切に組み合わせる。

6. 疾患についての解説

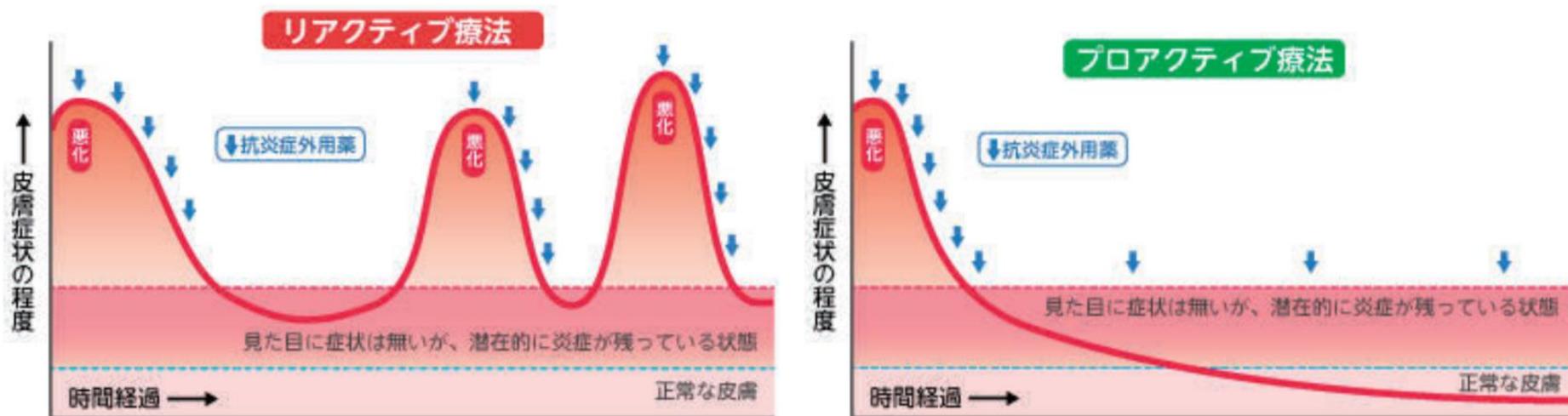
○ ステロイド外用薬

ステロイド外用薬はアトピー性皮膚炎治療の基本となる薬剤であり、その強さ(ランク)を把握し、個々の皮疹の重症度に応じて適切なステロイド外用薬を選択し、さらに病変の性状、部位により剤型を使い分け、炎症を十分に抑制するように使用する。

6. 疾患についての解説

○ プロアクティブ療法

プロアクティブ療法は、再燃をよく繰り返す皮疹に対して、ステロイド外用薬やタクロリムス軟膏により速やかに炎症を軽減し寛解導入した後に、保湿外用薬によるスキンケアに加え、ステロイド外用薬やタクロリムス軟膏を定期的に(週2回など)塗布し、寛解状態を維持する治療法である。



(アトピー性皮膚炎診療ガイドライン2018)

6. 疾患についての解説

○ プロアクティブ療法

- ✓ アトピー性皮膚炎では炎症が軽快して正常に見える皮膚にも炎症細胞が残存し、再び炎症を引き起こしやすい。
- ✓ この潜在的な炎症部位にステロイド外用薬やタクロリムス軟膏などの抗炎症外用薬を間歇的に継続使用(プロアクティブ療法)することにより、炎症の再燃を予防できる。
- ✓ ただし寛解導入療法からプロアクティブ療法への移行は、炎症が十分に改善した状態で行われることが重要。
- ✓ 塗布範囲、連日投与から間歇塗布への移行時期、終了時期等については、個々の症例において皮膚症状、経過、検査値などから総合的に判断する必要がある。

7. 治療・経過

○ 治療方針の見直し

湿疹の増悪と軽快を繰り返していた原因は、潜在的な炎症が残っている状態で治療が中止となっていたためと考え、寛解導入した後に、ステロイド外用薬を間歇的に塗布し、寛解状態を維持するプロアクティブ療法を行った。

8. 新たな治療方針による経過①

○ 寛解導入療法

具体的なスキンケア手技(軟膏の塗布量や塗布方法)を指導した上で、ステロイド外用薬の連日塗布を行ったところ、寛解(掻痒や紅斑がなく、皮膚の隆起がもない)状態となった。

9. Take Home Message

- この症例を通して伝えたかったこと
- ✓ 再燃を繰り返すアトピー性皮膚炎には、皮膚所見が改善したあとも潜在的な炎症が残存するため、抗炎症外用薬を定期的に塗布して寛解状態を維持するプロアクティブ療法が有効である。